

ともに問い続け、価値を創造する子どもを育てる ～探究するアートを通して～

造形科研究部

1 主題設定に向けた動きについて

新たな研究主題の設定に向けて、様々な問題意識に目を向けて話し合いを進めてきた。当初は、行事や活動における子どもの主体性や創造性をもっと伸ばすことで、自分たちで学校を作っている、自分たちがきっかけで物事をよりよく変容することができるという喜びをもって社会参加できる子ども像を掲げた。そこで、行事や活動、授業の終わり方に注目し、「未だ完全ではない」という視点で物事をみることで、よりよいものを創造しようとする態度を育成することを目指そうとした。様々な教科で授業を公開し合い、協議し合う中で、未完を自覚し、発展し続ける態度を育てるためには、それなりの「深い問い」が重要であることが明らかになった。答えが1つではない、立場や見方によって考えが変容する、不確かで曖昧さを含むことを否定したりあきらめたりするのではなく、そのような終わりのない、考え続け、問い直し続ける大きな問いを教科や単元の中に見出し、向き合い続けることが、新たな価値を生み出したり、変容し続けることにつながるだろう。また、このような「価値の創造」に加え、対象について自分なりの意味づけを行うことを「私の～観」という、多様な解釈のできる対象に対する自分なりの「観の形成」として重視する。このような全体の流れに沿って、造形科として考え、取り組んできたことを以下にまとめる。

2 造形科における「未完成的態度」と「問い続ける姿」から「探究」へ

当初の流れにおいては、「未だ完全ではない」「終わりが無い」という文脈に沿うと、造形作品に終わりではなく、何度も作り変えたり、上描きしたりすることで、終わったと思ったことの先にまだ可能性があったり、思いもよらない形が表れたりすることを味わうような子どもの姿を想像した。これは、図画工作科学学習指導要領にある、「つくり、つくりかえ、つくる」という表現が表す、連続性や再構成する創造的なプロセスを大切にすると通ずる。しかし、その後の検討により、「問い続ける」というキーワードの方が浮上したことにより、造形科の授業を構成するにあたり、探究の過程を意図的につくりだし、大きな問いに向かって試行錯誤し、表現したり、鑑賞したり、問い直ししたりする姿を引き出す授業を考案するに至った。

そこで、「探究」をベースに美術教育を行っている先行研究と出会い直し、教科の特性を踏まえた、造形科ならではのアプローチを模索していった。

3 芸術における探究

デューイは「経験としての芸術」(2010)の中で、芸術を完成品としてではなく、人と環境との相互作用の中で成立する経験の様式として捉えた。芸術的経験は、「実践的な面・感情的な面・知的な面」が統合され、意味が「一つのまとまり」として立ち上がる過程であるという考えは、造形科の学びを作品制作に限定せず、生活経験や他教科との連続の中で探究されるものとして位置づけることにつながる。

小松(2018)は、「美術は探究や思考の営みであり、芸術的省察によって質的知性を涵養するという教育的意義をもつ営みである」と述べ、表現や鑑賞の過程における「外的世界と自己との往還」が、自己の内面をゆたかにするという、美術教育だからこそできる探究や思考の価値を主張している。

また、桂(2020)による、デューイらの先行研究に基づく授業構成論を参考に、本研究における造形科の授業づくりで重視する視点を次のようにまとめた。

- ①「問い」があり、向き合うたびに考えが深まる。
- ②「問い」に基づく探究が、個人の経験に根ざした個性的な意味を持つものである。
- ③自分の「問い」や探究の過程および作品が、他者とともに経験したいものである。
- ④授業者は、目標や作品のよさを正解として示すことなく、個々人の固有の見方を保持したまま、子どもたちによる真正の探究を実現しようとする。

4 子どもの物語と教師の働き

探究をベースにした授業構想は、その目標と評価の在り方を問い直すことにもつながった。桂(2020)は、教授目標に基づく既定のゴールがある授業に代わる「目的」ないし「包括的目標」のあるオープンエンドの授業構成が必要だという。また、「教師が自らを、共に探究する一員として位置づけるとき、授業者は、個々人のナラティブを引き出し、互いに耳を傾ける場を醸成して、個を超える協同の探究を編み上げていく役割を果たす」とし、教師自身が「不完全を自覚し、「問う」存在であろうとする」中で、多様な意味と価値を共有する営みが〈評価〉であると述べている。教える者としての立ち位置と授業における教師の役割を問い直した授業実践は子どもにどのような意味をもたらしたか。続く授業の実際の頁で検討する。

【参考・引用文献】

ジョン・デューイ(2010),「経験としての芸術」,(栗田修訳)晃洋書房
小松佳代子(2018)「美術教育の可能性」,勁草書房
桂直美(2020),「芸術に根ざす授業構成論」,東信堂
笠原広一, Rita Irwin(2022)「アートグラフィー」,学術研究出版

(文責 芦田 桃子)